

文庫事業「筑紫聖堂」落成の記事を入れること、発刊日を遅らせました。お許し願います。

春季 釈菜
特輯号

亀井学を大成した

大儒 亀井昭陽伝(十一) 庄野 寿人

・昭陽の苦惱
(二ヶ月に賢弟、長男、賢甥を失う) 哀惜の記

文政八(一八二五)年、昭陽は二月十四日・太宰府の長弟雲来(字は大壮)の死を知る。享年五十歳。

源吾(少栗婿の雷首)が来て告げるに宰府より人走り来て雲来の病い急に革る(危篤をいう)という。その日の朝食前に玄民が博多の生民(南冥医師の高弟で亀井一家の主治医である)に昨夕の病状を告げるが生民は難症の患者を抱え宰府に往けず、ために同輩医の道祐に頼んだが既におそく薬手を盡し得なかった。

十五日。昭陽は寅刻(未明)に起き、人を走らせ手紙を宰府に届ける。また長男義一郎を宰府に行かせようとしたが、義一郎の様子も尋常でなく激しい吐瀉で休んでいるという。昨夜遅く雲来の通夜に往き泊まっているという。博多の生民に連絡すると、すぐ西新に直行するので博多の留守宅から薬籠(医師の往診に器具と薬剤を収納。いまの往診袍である)を昭陽宅に取り寄せておく依頼がある。

生民、来り義一郎の容態を診察した後、今宵は亀井家に宿泊して義一郎を診る、と。夜は昭陽と語り合う。夜、恵助来り、不祥を払う祈禱をするという。昭陽は黙して一言もせず。

十六日。雲来葬儀のため伊崎の義弟山口白貴の長男駒太郎が、昭陽次男鉄次郎と赴く。

十七日。平旦、晝過ぎ昭陽長子の義一郎死す。発病わずか三日にならない急死で、症状から食物による中毒症と、生民が遺憾をいう。

家氏(昭陽妻)が髪を梳き、源吾と玄沖が湯浴して肩衣を着せて棺に斂める。翠雲房(義一郎生前の居室)の世話をした召し使いなど皆な通夜する。

十八日。浄満寺の家墓地に葬る。寺納金式歩式朱、諸費銀廿四匁。

十九日。鉄也と源吾、世之(昭陽三女十五歳)、阿恒(義一郎の展墓。義也の遺品を検るに余の江戸日記を讀むあり)。

能古博物館だより

当日の香典と焼香六人(氏名略)、(注)義一郎の死と葬(いは世間に広げず簡素にしたようである)。

二十日。幸府・大社の初七日。道太郎を代香にし南金(二歩)を香奠にする。晨也(大年の遺子)銀二匁六分、野芥の文四郎団子四折、橋本屋壽饅頭煮茶各一折、浄満寺饅頭九拾団、敬之(昭陽次女で母の実家早船家に入る。後に養子を迎える)姪浜に帰る。阿恒、阿幹の兩人昨帰。少乘は前年閏八月、娘紅染を産。外出を控えている。

廿一日。源吾幸府より帰り初七日の請帖を諸親に知らせる。

廿二日。この日から義一郎廿三日初七日の通夜法要に入る。

昭陽は未明に起きる。朝食前に敬之が来る。食後に源吾、阿幹、又七来り皆な初七日に加勢する。書生十二名が椎茸一折、熊本偵章が寿泉茗二包、早船助次郎・南金(二歩か)紙屋太一郎・銀六匁、その他十六人から供物あり。また藩士の久世・三木・月成・梶原・松隈・内田・吉積・二宮の八氏より香典、供物あり。これに紺屋・河崎・内田・米屋・扇屋の各商家より典物、近縁の山口駒・真鍋宗太郎・井上権一郎・徳永久一郎・小池壯次郎・山田卯之吉・大賀

権次郎・生島生民から供物あり。これらには昭陽は面接し謝意を述べる。廿三日。初七日、昭陽は卯刻(六時)に起床、源吾と浄満寺に、義也の墓前に立つ。桜桃百花で花筒を覆う。また久七をして造筒を墓西側に植え込み、香炉を机上にし、白檀包を副えるなど墓前を飾る。今回の葬儀により義一郎生前の知己と交際の広がりを見ることが出来る。なお供物の類は遠地からの到来あり、翌廿四日に、なお十五名の氏名と供物品の記載がある。昭陽が自肅した義一郎法要も相当の規模になったことがうかがえるのである。

義一郎の初七日速夜法要の参列者三十八人、初七日四十九人計八十七人の供膳は、長男の弔いに友(少乘)と敬(母の実家早船家を嗣ぐ)の両姉が香奠として一切負担すると母に告げ、諒解を得る。

廿四日、記事省略

廿五日、長州藩士藤田玄民と憎響十の両名が義一郎の没後入塾していたが、昭陽は今日相見(しょうけん・面接すること)した。これは父南冥の高弟であった調黄溪の紹介による。

昭陽甥の山口駒太郎が藩命で江戸勤番士となり出発の挨拶に来る。この甥は昭陽妹婿で山口白賁長男で、

昭陽の身内になるが、最も好ましい青年で、その学才は昭陽がなんとかして亀井家後嗣に望みたいと考えたほどである。

「身体をよく気をつけるよう」、くりかえし別離の言葉にした。藩からも前途を期されながら、この青年が、四月三日江戸藩邸にて急病死する。

昭陽の悲哀まさに賢弟と長男に始まりわずか二ヶ月足らずに三人の身内を失うことになる。いずれも昭陽独りのことならず亀井家学に重大な打撃である。

(注)以後、弔客と供物、香奠の記事が多く本稿進抄のため三月および次の月日まで記事省略する。

『空石日記』四月廿八日「莊太郎来り告げるに駒太郎病死を言う。昭陽、大驚。直ちに鉄次郎をして伊崎(駒太郎の実家山口氏所在)に走らせ、」

事実を確かめ委細を知らうとする。其の病い江戸藩邸からの情報に曰く、三日朝五ツ時、脈絶えり、と。嗚呼、余の一臂又折れり。

廿九日。朝、内氏曰く昨夜、甥の不幸を考え小寝せず、と。乃ち眠室は西窓下なり。余、顔を剃り櫛梳き、食後に司を伴い伊崎(駒太郎の父宅あり)に往く。雨甚し、駒太郎の為に会議す。後嗣を弟驒次郎に定めて終日弔問客に対す。この内、藩士は

帆足平次・吉成久内・鷹取正助・南川豊八などいづれも駒太郎友人で藩中でも将来を嘱望される青年で、昭陽も好感を得た。

此の日、駒太郎の髪毛・刀槍・衣物届く。(中略)駒太郎墓は麻布六本木浄因寺に在り。

五月朔日。駒太郎は甥である。よって喪の故に孔子聖像を敢えて拝せず。甥の忌服七日すべくも時日を過ぎておるので一日の遠慮とする旨、書生に言い渡し、当日の講義を休む。

二日。朝講。故人駒太郎の碑陰誌稿文を述べる。寛三を走らせ今宿の源吾を召請し、孫、紅染兒に小銀一星を貽らんとす。源吾偶然に長垂山で寛三と遇う。鉄也は伊崎に往き駒太郎葬列に加わりて唐人町善龍寺会葬に列す。内氏(昭陽妻のこと)と友と敬は代葬を囑し香す。

三日。内氏、駒太郎の善龍寺墓に参る。夜、詩経会。

四日。朝食後、駒太郎墓の背面文を書す。鉄也、善龍寺から伊崎に往く。夜、筆函を拂い検筆して三函に収める。(注)昭陽の駒太郎碑文を書き終えたのである。

五日。講、休業。内書生十九人、節句を賀し酒二斗五升を贈られる。辰ヶ橋の光明寺深恵和尚より酒三升

届く。式部来って賀酒一升。

此日、得る酒三斗四升。夜、鉄也と飲み臥す。

六日。休講、女軍帰らず、ために内氏朝飯を炊ぐ。鉄也・伊丹・斎藤両家に往く。昭陽の藩役筋で、かねて依頼の書を届ける。道太郎帰省より帰り筈、梅を持参する。晝過ぎ女軍帰る。旧婢の岩も来る。廣郎(旭荘のこと)書翰を以て兄淡窓の病、快起をいう。

七日。講後、医国堂記を絹に書すため野紙を作るに既成有り徒勞を知る。廣郎・酒二升、葛粉一箱、土繁(駒太郎の号)に奠す。鮮鯛三尾、割烹にして鉄・司・徑太郎らと飲む。夜左氏伝、会講。

八日。鉄也、土繁の善龍寺齋に赴く。昭陽は堂記を写し、全紙二枚に及んだ。

能古博物館だより

玄冲より潤筆料として岩国縮二反、

方金二片(二分金ならば金二両)大鯛巻を贈られる。小子(自分のこと)謹謝。村上才助来って清末(南冥・

昭陽は永富独嘯庵の縁故で清末藩中に旧門弟多い)より南金二枚(一分と二分貨のこと)と大鯛を受ける。

これに幅二横四を書す。大浦方策来、菊露(酒銘)三升、また奠果一箱を

(3) 第24号

蓬洲(故義一郎のこと)に供する。

夜、詩経会講。

九日。記事少なく省略。

十日。書生の草稿添削す。蓬洲生前の机を商領室に移し、居室翠雲房は鉄也を移す。玄冲が博多に往くに蓬洲の大字「命理」二字書表装を託す。

十一日。講後、己れの結髪を梳く。鉄也を呼び共に飲む。幸三郎对州より帰塾、香草一函を奠す。此兒よく蓬洲を撫育してくれていた。噫、

去年今日圭公来り、初めて月琴を聴いた。末女の宗が左宰絃の弹奏を和したことが追想される。

夜は左伝会講、つづいて詩疎記もする。

十二日。幸吉郎から梅大籠を貰う。小十郎が帰塾、牧大野の吊書、広瀬謙吉・樺島氏から奠包を托さる。

組頭衣非氏に出頭、挨拶す。夜は詩経会講。

十三日。王公(祖父をいう)四十七年忌、墓に詣ず。菊来り越後の乾

蔵を徳蔵京より帰るに持参。江上上述太郎・源八郎(兩人は江上荅州の子息)江戸勤番より帰藩、駒の消息を語り以て哀しむ。東海は病あり。広瀬謙吉も病み明日帰る、と。

三月下旬、駒太郎に出状が江戸邸より返送される。噫、

次に、昭陽が親愛する身内、近親

でとくに嘯望する青年まで三名を短時日に失った哀惜の心情と、雲来、義一郎、駒太郎について各々の身状を語っておこう。

雲来は、昭陽におかれること二年と一月、文化二年(一七七五)九月、南冥の次男に出生。幼名は昇、字は大壮、後に雲来を号し、これが広く知られるので、本稿はこの号で通す。

雲来四歳の時、父南冥が儒医兼帯職で福岡藩に登用されるので、この時から本人も藩士籍に編入され、これで七歳になると帯刀資格を得る。

この二年後、祖父聴因は息子南冥の栄達を見て逝去するが、この時はすでに雲来六歳で幼いながら祖父の容姿も目に残したと思う。

この祖父は雲来の将来に重大な決定付けをしている。父南冥に「男子二人以上を得たら、必ず一兒は佛門に入れること」を、平素から固く言

残していたのである。このことは聴因自らが二男(南冥の弟)を僧籍に入れており、雲来には叔父に当る。

叔父の曇栄は臨濟宗大徳寺の江戸東海寺修行中に、兄南冥の福岡藩登用と時を同じく、奇しくも筑前崇福寺に就任した。崇福寺は鎌倉時代からの歴史を有し、臨濟宗の名刹京

都大徳寺派に於ても首位に近い位階

を占め、また同寺から本山住職に普山を必然とされる。現に曇栄の前住職徳隠は大徳寺進発に当り、曇栄を後任に推せんしている。新任職曇栄の二十九歳という若さは、博多の町に評判と期待を呼んだという。

祖父は、この事実で男子二名が武士と由緒と格式の高い寺院に出世という現実には誇りを持ち、己れの男子指導に誤りない自信を固くし、子孫代々家門の名譽を持す信念を抱いていたようである。

かくして雲来は、父と叔父の曇栄に誘導され、十歳で剃髪し、大徳寺山門に入る。以来、厳しい雲水の禅修業に就くが、結局仏門の水に合わず再三修業を離脱。その都度、南冥の手を尽くした慰留に応じるが結局は続かず、この間の、南冥切々とした弟曇栄に宛てた書翰が文庫に残る。

結局、雲来は故郷に近い朝倉路をさまよい、父の医学高弟であった星野陽秋の援助を得て医修業に励んだ。

寛政十年、この消息が兄昭陽に知れるが、昭陽は、折悪しく亀井家罹災、学問所焼失による廃校、教職者の職務替えなどで雲来の事情まで手が及ばず、ただ本人の還俗(僧籍を抜き一般人に戻る)を認め、将来は

能古博物館だより

医を以て身を立てることに賛成。未だ本人二十三才。前途はあると励ました。後に太宰府での開業を助けた。これで雲来は医学を習得、学塾も併せ開き、詩書も人に知られるに至った。文庫に残る雲来遺墨にも、おだやかな詩と書が見られる。

昭陽は次弟の大年を早く亡くしており、唯一の弟として、昭陽も親身の語り合いができた。ただ雲来が苦勞のせいか寿命を早めたのが惜しまれてならない。

雲来家は養子少進によって相続され、その配偶には昭陽末女の宗が嫁し、この系譜は現代まで続いている。

次は義一郎である。

亀井の出生因縁は女兒が先き、二三女をおいて男子となる。昭陽長男の義一郎もその通り、長姉友・次姉敬、生後七日で早世「妙露童女」の一年九月おいた文化二年（一八〇五）九月に出生。初名を驛虞とされ、字は虞、通称義一郎となる。この通称が藩士籍に登録される武士名である。

昭陽は、最初の出生児に男を期待したので知人に出生を問われたのに「役立たず候」としたことがある。ところが少栗八歳には、昭陽は片時も離せぬ有益女に成長、己の著述に辞書引きは昭陽よりも早く、ために

少栗の不在には昭陽は筆を捨てるまでになった。少栗は当時すでに昔のむつかしい辞書を暗記するほどに精通していた、という。

ために少栗の結婚まで八歳年下の義一郎は、ついに昭陽に役立たずに済んだようである。

それでも昭陽は、義一郎は武家の跡取りして不可欠の存在である。不幸にして現在の亀井家は儒者奉公ではなく一般の武士として戦場に出れば先陣を駆けねばならない。成長につれて剣道場にも出し、刀剣はじめ武士のたしなみ作法も身につかせた。しかし本願は亀井家学の興隆であり、とくに詩・書で知られた祖父以来の伝統は伝世させねばならない。幸いに、こうした意識は義一郎もよく身にかけていた。とくに書の上達は早く、六歳の大書に人を驚かせたという話もある。

祖父南冥も、義一郎を愛し自分の禁足罰に人目をしのびながら、皿山箱崎に伴うなどした。

義一郎は、八歳で家塾の少年組に素讀講義などした。

こうした義一郎の最大の不幸が生じたのは、十三歳の八月である。

父に伴なわれて懇意な材木商の新築祝いに出た。父共々、亀井家の酒

好き血筋もあり、義一郎も前髪の少年ながら多少の酒気も帯びていた。誤まって材木の林立する間を通り、

衣類の袖が引っかかった材木を取除くつもりが連立した木材の崩れとなり、義一郎は転倒し足は下敷きで身動きもできない。父昭陽は酒が過ぎており、義一郎との距離もあつた。

この椿事で、義一郎を包むため亀井家の布団を借りに走ったものである。これで母親伊智は、早く事態を知った。

この酒宴に、昭陽が義一郎を同伴しようとするのに、母は強く反対し義一郎が出席する筋合いもないと抗弁したのである。

昭陽は人に助けられて帰る有様、不覚の酔いに呵責の苦悩がうかがえた。それでも妻は、昭陽をきつく睨んでいた。状況は、母から少栗に自分の悔やみと、嫡男に取りかえしのできない不具者になる苦悩を切々と訴え、おそらく家督もむつかしいと心配した内容である。このため亀井

家に曾てない重大事であると母は考えていたのである。兄弟の学問進度も、義一郎には長男として見識と努力が見え、二男鉄次郎（後の陽洲）

には、とても器量ともに及ばないと見られていた。

亀井家の学統は別に、公式には藩士家督が義一郎に課されているのである。義一郎の脚は松葉杖を必要とし、尋常の動作は無理である。

それにしても義一郎の勉強は真剣さを増した。身体の不具を克服する意気込みである。

こうした長男に昭陽の心境は苦衷と、かつ複雑であつたとされる。

酒量はとみに減つた。義一郎の廃嫡（家督を除くこと）は、父昭陽の不覚によるものである。

こうした時期に宰府雲来は「とても義一郎の藩士家督はむつかしいと思うので、宰府の自分養子に考えてはどうか。そして鉄次郎の家督予定を考えるがよい」と言ってくれた。昭陽の気も動いたが、その直後に雲来と義一郎という両人の死が見舞つたのである。

義一郎の死は、骨折以来八年、この間、昭陽には人知れぬ呵責が加わり、義一郎も亦無念の苦悩をつづけていたであらう。

義一郎死の前年、弟鉄次郎は冠礼を行う。これは家督を前にした儀礼である。この四年後、父昭陽五十七

歳隠居、家督を鉄次郎（後に陽洲を号）にする藩允許を得た。

山口駒太郎は父山口白貴（通称民

中国漫歩 原 敬道

平)が南冥門の逸材とされ、妻は南冥の三女つまり昭陽妹である。

白賁は藩西学創立に江上荅洲らと南冥推薦で福岡藩士に登用され、同学教官となる。白賁の生年など詳細を欠くが、昭陽逝去すぐに藩絵師尾形愛遠(号洞齋)が丙申年作とする昭陽肖像画に「白賁賛書年七十八歳」としているので、昭陽に十歳年長であったことがわかる。

白賁の生家は肥前厳木村の旧家に代々医業を以て徳望が篤かった。

白賁の長男駒太郎は刀槍もとより経学にすぐれ、ために叔父昭陽の嘱望が篤かったが、藩の吏務に上司の信認があり江戸勤番に抜擢されたのである。

上勤一月に満たず急症に冒され短命の生涯を終えた。

家は弟啓太郎が嗣ぎ、同家は福岡藩士として維新に至った。

市内唐人町善龍寺に同家の墓あり。山口家と駒太郎については、残念ながら資料不足が痛感された。

同家の縁者として、会員に中央区の三宅碧子さん、筑紫野市の川浪由紀子さんがある。すぐにお電話をしてお願いましたが、逆に文庫でお聞きする以上のことは私共にはありません。今後ともよろしくと励まされた。

若い頃、中国に居て職務上で主に知識階級と言われる人達と付き合い合った。英・独語で用がたつたので残念。乍ら中国北京官話はさっぱりだった。

北京には五年半住んだ。古く新しい古都、魅力ある街だった。殊に秋天の北京はこよなく美しかった。女性も美しかった。白塔のある北海公園が好きでよく茶亭に赴いた。南支にもかなり長くいた。広東の中山大学を拠点にした。南方の人は米が主食である。日本の米粒とはいささか趣が異なり何だか細長い粒だった。浙江省の遺跡から七千年前の稲作を立証する出土品が出て来たという。稲作は弥生時代前期に江南地方から日本に渡ったとされる。

南方殊に広東人のゲテモノ食は有名で当時路上では蛇はもとより犬、猫、猿、熊の頭まで売られているのは仰天した。

中国人と「ニンニク」は切っても切れぬ間柄と思っていたが、意外にも南方人で「ニンニク」を嫌う人がいて、口の悪い福建人の中には「あんなモンは人間が食べるものではない」と言う。私は好物であったが……

しかし、南方の華人は何でも食べる「机以外は何でも食べる……」とのユーモアが生まれている。

北方ではお茶は「花茶」即ちジャスミン茶であり、北京生まれの北京育ちの少姫と親しく、ときおり彼女の借りている名島の家に赴き、そのつどジャスミン茶の接待を受けた。彼女も桜花を待たず帰国するという。能古博物館にも同伴した。喫茶席からの博多湾の眺めがいたく気に入ったようだ。閑話休題。南方の人は「緑茶」である。茶を客にもてなすのは最上のことときいた。

大歴史家司馬遷の「史記」には北方と南方の違いについて書いており曰く、楚・越の地方(長江の中下流一帯)は土地が広大なのに人口はすくなく米を主食とし、魚を吸い物にして食べる。焼畑も水田もある。木の実・草の実・貝類など豊富にある。まず飢餓の心配はない。随ってノンビリとしている。勤儉貯蓄などしないし商いも必ずしも熱心ではないので、金持ちはいないし、むしろ貧乏人が多い。

沂水・泗水(山東省)以北は五穀・桑・麻・家畜の飼育に適しているが、土地の広さに比して人口が多い。しばしば水害や旱害にさらされる。随っ

て不断の用意があり、貯蓄心がある。厳しい暮らしの北方人が、勤勉であり、自然の恵みがある南方人に怠け者が多く貧乏である。

司馬遷は大旅行家。自らの眼でよく見て歩き回っている。私も南方の女性は男性並みに肉体労働でも元気に働く。男どもは、晝日中から街頭で小金をはたいて博打に興じているのをよく見た。

芳香を放つ見事な花を売っているが、日本と異なり草葉をとりのぞき裸の花だけを針金でしつらえた輪の上につらね重ねて売っているのに奇異を感じた。強烈な南の陽光で育った花には芳香があり採色も鮮烈だった。何せ中国は広大であり、資源豊富。未だ何があるのか今もってわからない。

中国に学ぶため遣随使、遣唐使の一行は幾艘もの船に分乗し、財物と貴い人命を危険にさらして海を渡った。正に命がけ、多くの財と人を海に失っている。現在ここ福岡にも幾多の若い男女留学生在が日本語勉強のため来福している。私のすぐ近くのビルの一部に語学学院なるものがあり、午前、午後と若い男女留学生在にぎにぎしく授業を受けている。往昔を思えば感無量である。

「老子」を聴く (五) 安 陪 光 正

カタバミ



3月11日、老子最終講義後、福田・庄野両先生を囲んだ受講生一同、机上に「上善如水」がある。

早春の棧橋に降り、バス停のある広場へ出て、旅館「潮騒」の横から細道を曲がる。旅館の梅が盛りで、メジロが花枝を飛び交っていた。道はすぐに荒れた坂道にかかり、真赤なヤブツバキが石段にちらばっていた。仰向けに落ちた椿は、赤い花卉に黄金のおしべを秘めた玉椿。立ちどまって上を仰ぐと椿の茂みにまばらに花をつけていた。花をぬってメ

ジロの姿が見えがくれし、その上に春の雲が浮かんでいた。さらに細道を登って博物館の入口へ出る。

門柱を入ると右側はさんさんたる陽射しのカタバミ畑、左の石垣の上にもカタバミが広く地に敷きつめていた。私たちが此所を通るのはいつも十二時半、天気がよければ白やピンクの花が青葉を覆って咲く。カタバミは多年草で、茎は細長く地面を這って伸びる。葉はハート形で三葉からなる。曇った日には雨傘のように花を巻いているが、天気によれば五弁の花びらをほころばせる。講義をうける一行は、先生と一緒に渡船に乗り、このカタバミの花畑に立ちどまったものである。博物館から下りてきた二人の女性が、花畑の前で立話をしていた。花の名を知らないらしく「これはカタバミですよ」と教えると、ふりむいた女性の耳にイヤリングがキラリと光った。

カタバミの茎や葉は咬めば酸っぱいと聞いていたので、一葉を摘んで咬んでみた。少年の日に咬んだ酸葉

(カスンボ)と同じ味がして、ふるさとがなつかしく想い出された。博物館の敷地は島の南斜面にあって玄海の北風を防ぎ、南面する陽光豊かな温暖の地、よほどカタバミの生育に適しているらしく、花期が長い。受付の瓦屋根の上は桜と雑木林、まだ木の芽立つとは言えないが、それでも冬木の枝が色めき初めていた。

みちぐさ

今日の講義は、第三十七章の老子上編「道経」で終わることになっていた。「將に之を奪わんと欲すれば、必ず固く之に与う」、奪いとろうとする時には、必ず前もってしばらく与えておく。これは第三十六章中の一文であり、外交・内政の要諦を説いたもの、権謀術策の臭いの濃いい章とされている。私はこれを聞いた時、「得んと欲すれば、先ず与えよ」との句を想い浮かべた。自分が愛されたいならば、先ず自分が相手を愛せよ、そうすれば相手もまたあなたを愛するであろう。聖書でも「自分を愛するが如く隣人を愛せよ」と説く。前者は餌で魚を釣るようなもの、戦国末期の戦乱を生き抜くためには、このような術策なくしては生き残れなかつたのであろう。

日頃の行いは、天知る・地知る・己知るといふように、自分の中に、もう一人の己がいて、その己がすべてを知っていると考える。自分の己を自己というが、他人もまた各々の自己を持つ。それは自己からいえば、他己である。地球の人口六十億が、その数だけの自己を持つことになる。世の中で一番大事なものは各々にとつて自己であるから、自己を大切にしまわなければならない。「人を知るものは智なり、自らを知る者は明なり」とは第三十三章の一句である。禅でも自分で己が心を照らし、本来の自分を知ることによって主体性を確立せよと教える。白隠禪師座禪和讃は、「衆生本来佛なり」を以て始まるが、自己といい、他己といい、自らを知るといい、佛というも、すべて老子起源かと思ったりもする。世の中の生きとし生ける草木虫魚、すべては大地上にあって育つ。人もまた己という人類共通の精神風土の上に生きるのであろう。

第十六章に「夫の物の芸芸たる、各おの其の根に復帰す。根に帰るを静と曰う、是れを命に復すと謂う」あらゆる生物はいかに茂り栄えても、それらが生えた根にもどってし

まう。それが静寂といわれ、運命に従うことといわれる。この帰根の文字に接し、私は中国の諺「落葉帰根」を思い浮かべた。木の葉が枯れて木の根に敷き、腐って木を養って再び根に帰ってゆく。そのように人は何所で死んでも、うまれた所の大地に骨を埋める。ふるさとに帰ることを望むという程の意だという。これに対しては「落地生根」があり、人生至る所に青山ありということになる。

この一年

福田 殖先生の老子講座は、平成六年四月から七年三月まで、八月を除いて月一回の計十一回が催された。四月の受講申込は二十二名、他に博物館職員二名の聴講があった。各月の出席人員は、四月二十二名、五月二十一名、六月二十五名、七月十七名、九月十七名、十月十五名、十一月十五名、十二月十三名、一月十四名、二月十四名、三月十五名であった。六月が二十五名だったのは、臨時参加の二名があったからである。

出席率は、十一回の皆勤が一名、他は多くが十回〜八回であった。遠くは久留米・粕屋郡・宗像郡からの参加もあり、大変熱心であった。

三月十一日の終講は、先生にお願

いして午前中に終わらして頂き、昼食を共にして懇談の機を与えられた。会食の案内状を二十名に出し、十五名の出席、五名の欠席であった。

出席者は、

島 義博 小野恵美子 浜崎信也

丸尾好幸 丸尾道子 有須田由佳

増田寿範 佐々木征吾 石橋観一

飯田 晃 大神義正 馬場白光

野上哲子 林野祥子 安陪光正

招待者は福田 殖教授・博物館の

庄野寿人理事長、計十七名の賑やかな会食であった。会場はいつもの講義室で、二人の先生を黒板の前に、

受講性がその前にコの字に机を並べた。初めに世話人を代表して私が挨拶をした。

「福田先生による一年間の講義によって、本を読んだだけでは理解できなかった老子が大分身近に思われるようになりました。今後は独学でも何とかやれるのではないかと思っています。前半受講していた家内は、九月と十二月に孫が生れて出席できなくなりました。『老子の無為、柔軟、無心を象徴する赤子は、道を体したものである。自分は日々老子と共にあるのだから』と言っていました。

本日は会食にあたり、両先生に御礼申しあげますとともに、博物館の

職員の方々のご配慮によって、大変楽しく受講できましたことを感謝いたします。」

ついで島君寄贈の「上善如水」の銘酒二本によって乾杯をした。音頭とりは最高齢者の石橋さん、八十四歳で亀井南冥の血を承けた方だという。その後は会食しながら順次自己紹介をした。途中庄野先生から南冥の学風や人となり、寛政異学の禁などについての説明があった。

「寛政二年（一七〇）幕府は、朱子学を国学とし他の学説を禁止した。朱子学は体制派、御用学派であり、南冥は改進的徂徠学派に属していたため、爲政者に警戒心を抱かせ、福岡藩もこれを禁止した」

などと話された。最後に馬場さんによって両先生への謝辞が述べられ、無事に会食を終わった。

おわりに

私はこの四十年余、病死した人の脳を見てきたが、今でも、はじめて顕微鏡で見た神経細胞の美しさを忘れることができない。神経細胞はそのままでは見ることができないので、ニッスル染色を施して検する。顕微鏡の視野の中に赤紫色に染まった細胞体、その中央に位置する細胞核や

ニッスル小体、何百という大小の神経細胞が入りまじって、あるいは整然たる層をなして配列するさまは、満天の星を仰ぐように神秘的である。

これらの神経細胞が視覚や聴覚刺激をうけ、学習して物を覚え、考え・判断して行動する人智の不思議に想いを走せた。脳に宿る百五十億の神経細胞、そのような有形の物質から、無形の精神がどのようにして生み出されるのであろうか、ただただ驚嘆するばかりであった。そのような想いは、四十年たった今も変わらない。

甲骨文字と金文とは、現代漢字の祖型であり、安陽の殷墟から大量に出土した亀甲や牛の肩胛骨に刻られたような古文字に始まる。その後書体の統一や紙の発見によって益々発展して今日に至った。これらによって人々は人智の蓄積を重ね、今日の我々は二千五百年前の老子を学ぶことができる。

能古博物館は人手を加えぬ雑木林の中にある。この一年、能古の海も山も春夏秋冬の移ろいを我々に示した。波の音、風のそよぎ、木々は芽ぶき、青葉となり、紅葉して大地に散り敷いた。老子は自證自悟せよとかく道を示すが、凡夫むなしくその前に佇むばかりであった。

聖堂落成

積菜式の祝辞の御披露

来賓御祝辞は、両日とも式進行の都合で各日御一人に制約された。

初日は、福岡市博物館の事業管理部長・田坂大蔵氏。

二日目は、福岡市教育委員会次長の大森邦明氏にお願いした。

どちらも文化と博物館事業に精通されており、さすがとされるお話で両日の式事初めを立派に飾られた。

昔も現在も私共が学んでおります
国文学は、その源はすべて中国の大
聖人孔子に発すると申して過言はな
いと存じます。

従って、孔子学の行われるところ
中国から朝鮮・日本はもとより東南
アジアまで孔子を先聖または学祖と
して尊重し、わが国では江戸期の徳
川時代を通じて朝廷・幕府にお公卿、
武士階級もとより農工商の庶民に至
るまで論語、孟子に始まる孔子学と



祝辞を述べられる

現教育委員会教育次長 大森邦明氏



福岡市博物館事業管理部長 田坂大蔵氏

その思想は徹底し
て、言語、風俗、
生活にまで及んで
いました。
このため江戸幕
府の湯島聖堂はじ
め全国諸藩の藩校
から在野の漢学塾
に至るまで、孔子
聖像の鑄銅或は絵

姿として尊敬される風習が生じまし
た。これを積奠・積菜として年々少
なくとも春秋二季に実行されていま
した。

孔子は、己れ自身を、神位に擬す
るなど全くなく、ただ学問の先輩と
して師弟関係にあることを望んでお
り、これによって後世の釈迦、基督
の信仰宗教と同様視されることなく
しかも学問自由の原則をくずさず、
もたらして今日に至っております。

明治になりますと漢学はやや後退
しましたように、孔子崇敬も少しく
薄れたと思われます。また各地に存
在した孔子像も江戸期を通じ地震、
火事また近代になって戦災被害も加
わり、数少なくなったとされます。

しかし、孔子に対する追念は日本
人の心に深く根付いており、古い鑄
像が重んじられ、その実在に決して
無視することはありません。

こうした現況の中で、亀陽文庫に
収蔵される孔子像をいま庄野寿人さ
んが聖堂に収め、文庫事業に肝要な
歴史認識を加え、先聖孔子の尊重を
実現に具体的にされたものと改めて
感銘する次第であります。

庄野さんに託された郷土の先輩で
ある真藤慎太郎翁による筑前亀井学
の研究と顕彰という願望の行きつく

ところ、孔子聖堂の建設は真に良き
帰結として、将来を期された適切な
効果を広く社会的に具現されたもの
とされます。

茲に心から賛辞を呈します。

また、これに至る庄野さんの永年
にわたる御苦心と一途な信念に対し
私の市民局文化部長在任時代からの
因縁も併せて深く敬意を表し、今後
の祝福を祈念してやまない次第であ
ります。

本日の筑紫聖堂創設にお招きを受
けて私の心情を率直に述べて、本席
の祝辞と致します。
(以上は大森さん御祝辞録音による)

積菜式の進行について

まず「積菜」という言葉について
述べておく、積菜は、孔子に崇敬の
気持ちを表す儀式(わが国流にいえ
ばお祭りと言われますが、少し違うと
ころがあります)

お供えをします。その土地の特産
を精選し、孔子に進献するのですが
式が終わると孔子からこれらを受け
列席者一同の食膳材料にします。

ここで孔子も共々に供膳に就く、
つまり師弟一緒になって食をいただ
くこととなります。ここまでが積菜
式になるわけです。

筑紫聖堂 落成式 の 概要報告と説明

いよいよ聖堂落成式は、平成七年五月五・六の両日を期して挙行。以後永く聖堂が例年行事とする春秋の『釈菜』（せきさい）を兼ねて実施された。

りよだ博物館古能

招待と会員参加どちらでも多数のご参加が予想され、これに会場の狭小と未整備を考慮。同一式事を二日間くりかえす。このため両日どちらかのご出席は任意とする往復ハガキでお願いしたのであるが、これがまこと按配よく五日が九二名、六日・八七名というご回答を得た。都合では、身勝手な日時振りかえのお願いも考えていたが、聖堂の幸先を易占で得たような好首尾に思えた。

いよいよ当日は、若干のご御来館もあると予定、両日とも一〇〇名の用意をしていたが、これまた予定が無駄にならぬ盛況を呈した。

第24号 (9) 釈菜式事の肝心は、祭官による礼式と献詩行事などであるが、祭官が着用する「法衣」は大先輩の多久聖廟に衣装一式を見本に借用しようと考えた。これにはかねてお世話になっ

ている元佐賀県美・博の学芸課長尾形善郎氏のご退任後はご郷里の多久市の歴史・民族資料館館長、また多久聖廟でも

春秋釈菜式にも祭官として奉仕されてきているので、すべてご便宜を得ると安易に考えていた。近年の多久聖廟は多久市による総括管理と運営にあり、また「財団法人・孔子の里」として市長自ら理事長を兼

帯され、その機構と構成も整然と運営されている。当方は、例年多久聖廟釈菜に列席



太宰府天満宮から協力された雅楽演奏 (雅楽師 栗原氏ら五名)

しているが、とくに本年はわが方の聖堂釈菜を目前にして南誠次郎理事を班長に上田、庄野の祭官予定者も加わり直接見学として参列した。結局、祭官が着用する装束は、百崎多久市長（聖廟では祭官筆頭の献官を勤められる）に直接お願いする機会を得た。もとより前記の尾形多久資料館長による取りなしである。

多久市長は即座に心よく承諾された。この法衣一式を見本に、博多大丸、岩田屋両デパートの呉服仕立てに注文。意外にどちらも生地材料の都合で丁重にことわられた。京都の

神事衣装店にお頼みなさること、と釈明があった。これは、よくわかるのであるが、とても当方の日時が許

さない事情にある。これで一件沈没かと考えた。

かねて当方の諸般事情に御理解のある平野、片岡の両役員に委細を話していたのが、思わぬ助け舟となった。和服と考えての発想は駄目です。洋服専門店にお頼みなさい。わかりました。ついでに「そちらでご発注くださいませんか、お願いします」これでバタバタしている状況に大助かりを得た。

もともと全国の孔子聖堂で釈菜式に皆さん、どういう衣装で奉仕されているか、これを念のため当方聖堂「生みの親」として三年ごしの甘えをしている翠川文字先生に電話で質問した結果は「戦前は、少なくとも日本の神官装束が用いられ、また紋付袴もあり戦後はモーニング着用も見られるとのこと。多久の場合は、元禄三年、京都の中村楊斎の指導を受けて、その著「釈菜儀節」によって行われているという。

多久様式は、全国にない古式ゆかしい仕様で、現代わずかに昔を伝えておられる好例と思います。と翠川先生のご見解である。

「よし。これで決まった」専ら多久に準じ、誠心誠意つとめることだ。こうした経過があつての中

能古博物館だより

国古風の儒者法服の発注となったわけであるが、出来上がりを手にするまで心配がつづいた。

こうして、五月五・六日の筑紫聖堂落成と春季積菜を實行したのである。

折りも良く、両日とも好天に恵まれご臨席各位にもお喜びいただいたと確信する。

秋季積菜式は、諸般の運営と進行を経験できたので、以後は担当者各員が整然かつ見事に、いかなれば役者ぶりよろしく、まじめに実演することである。

これで「筑紫聖堂」の存在と意義を広く認識を得ることになる。

博物館が陳列本意で内容品を見せるだけの業態から、職員も動きも演技を伴うようになれば孔子聖堂も活力を見せることになる。これは良いことで学芸員自らが孔子面前に出て勤める振る舞いこそが大事と心得る。

お陰で、楷の木も杏(あんず)も立派に成長が見える。これには二年にわたって多久の服部政昭、博多大丸役員、野瀬信一、翠川文字先生という各位のご協力には感謝できないものがある。残るところは我々博物館の管理責任だけとなる。

楷樹一本ずつに、右の各位名を永久標示を付けて、ご恩を忘れない聖堂精神を表明しようと思う。

いま一つ、重要なことは「雅楽」の演奏であるが、これは太宰府天満宮からの賛同出演を得た。

これには、当亀陽文庫の創立からご支援をいただく元太宰府市長の有吉林之助さんのご斡旋と、天満宮のご見解も「孔子祭儀」は自らも担うこと、とされたのである。

西高辻宮司はご不在であったが、小島居権宮司、前田弥宜のご理解は「先聖孔子はわが天満宮に於いても菅公学問の祖神的な存在です」と御認識が拜され、これが雅楽部の協賛派遣を得たことになる。この実現は当方に天祐神助とされる感銘であった。

~~~~~  
今回の積菜式に各地諸聖廟・堂に見られる漢詩の献進が行われた。よって各人の献詩を次に紹介する。

詩題は「筑紫聖堂積菜献詩」と統一をいただく。本詩掲載は詩篇四行組で作者名を誌す。

市内南区 大場マヌエ  
四海波平能古郷 晴空廣莫翠嵐岡  
新成聖廟奏笙裏 賽客恭虔拜儒光

筑紫野市大字紫 川田啓治  
筑海蒼穹響鼓笙 聖堂落慶瓦光清  
巖修釋菜龜陽里 永頌儒風賽客情

市内博多区 小山良子  
丘望澄湾松籟清 廟前楷樹已滋榮  
同修道統頌仁德 跪拜孔堂祥氣盈

三池郡高田町 近藤慶蔵  
連袖詩朋能古来 玄洋縹渺白雲開  
聖堂釋菜典儀裏 簫清鼓音懷古催

市内東区 榎藤菊朗  
能古渡津春色中 聖堂落慶耀蒼穹  
尊哉儒訓周無際 是亦龜陽名位崇

太宰府市石坂 園木勇行  
聖廟新成能古郷 振興儒教守綱常  
崇哉釋菜齋行裏 響度鼓笙玄海洋

宗像郡福岡町 辻 寛  
能古山阿楷樹中 聖堂新就燦蒼穹  
泗洙陣澤宣揚處 釋菜献詩傳德風

春日市泉 仲原 剛  
春融能古白鷗天 楷樹青春映日妍  
恭奉一詩供釋菜 焚香合掌聖堂前

筑紫野市二日市 野崎時男  
楷樹薰風能古郷 孔丘尊像拜廟堂  
敬恭釋菜頌威德 儒教慈恩萬世香

市内博多区 乳峰寺 平兮宗賢  
能古和光已晚春 移栽楷樹嫩枝新  
儒風吹冷文華地 聖廟完成頌吉辰

市内城南区 増田義哉  
玄海波平桃李春 尊嚴釋菜感銘新  
此成能古聖堂廟 喚起儒風古渡濱

前原市篠原 三島 勵  
洽度儒風能古岡 百花爛漫映春光  
鼓笙奏樂清音曲 釋菜森巖拜孔堂

市内東区 山口正利  
玄洋一碧海風微 楷樹新萌聖廟菲  
釋菜笙音能古洽 磧儒承繼翼追隨

市内西区 結城 進  
巖然聖廟此新成 釋菜恭修弦管清  
普遍儒風能古島 祠前拜跪一心平

以上、献詩奉納については、当館会員の結城進氏に諸般を煩わした。

式場・詩朗読を次の二氏によった。  
初日 献詩者 川田啓治  
二日目 “ 三島 勵

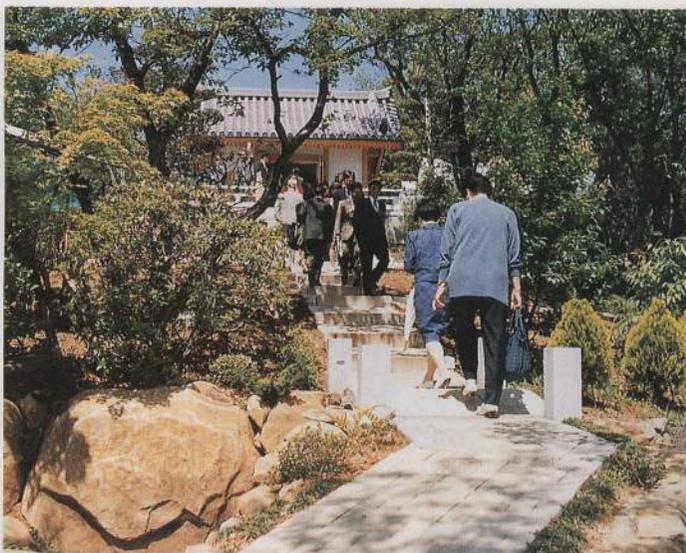
御両人とも鍊成された声音で抑揚も見事。出席者全員の賞賛拍手となった。

写真で見る

# 筑紫聖堂落成と

## 春季枳菜式

参会される風景 快晴に樹々の緑も映える



枳菜式に初めて祭官を勤める役員は、気もそぞろ。開始前の打合せ  
右から庄野献官、南掌議、吉原祝者、庄野献官は南掌議を後に付いて貰い、かがめ一拌め一立つなど動作指示を受けた。



受付は館事務職員東野ひとみと秋月以来の協賛会員片桐寛子さん



いよいよ式事開始、五祭官勢揃い  
右から上田、片岡、吉原、南、庄野



定刻、参列の方々は早くも席に就かれる  
庄野館長が式次第を話す



いよいよ参官五名式場に入る



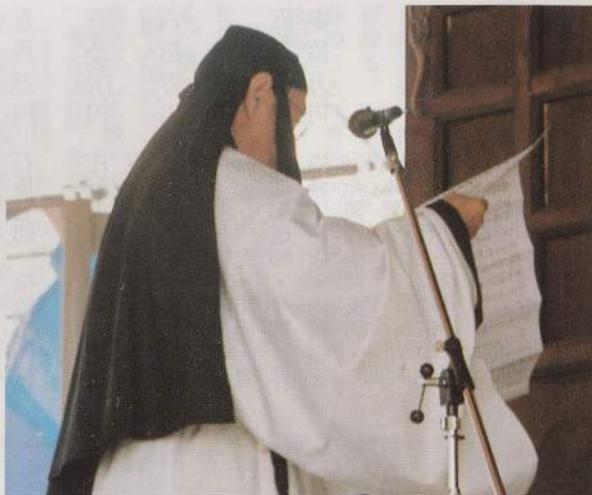
翠川文字先生の記念講演  
多年・御研究の深さと全国にわたる聖堂の現況を聴衆に倦か  
せない話をされた。  
日本人の遠慮が前席をあげ、後方は満席となる。



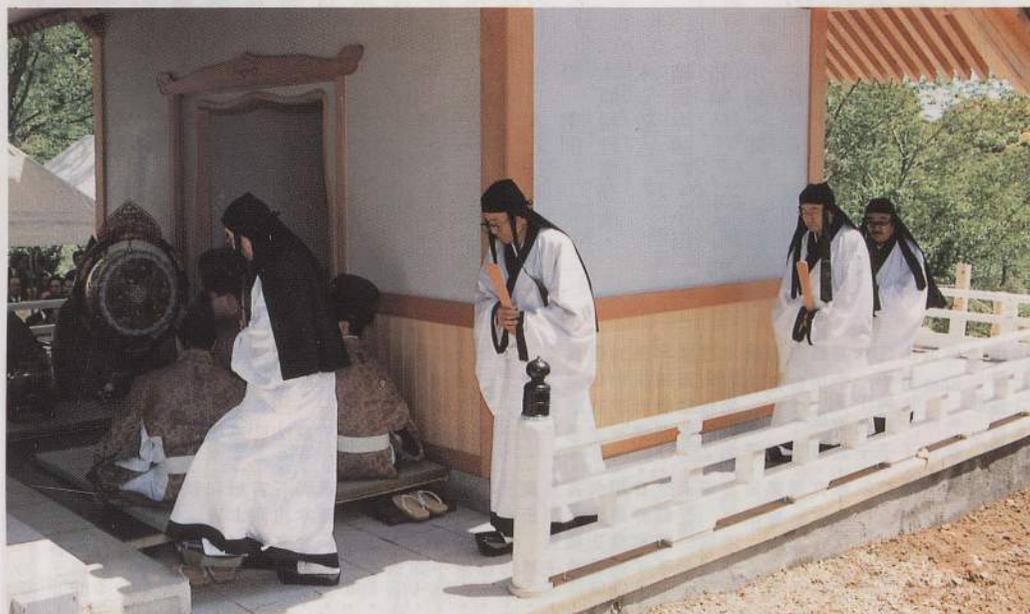
太宰府天満宮から派遣伶人の奏楽



献詩・作者披露に次ぎ朗吟川田啓治さん



庄野献官の祝文捧読



式事終了・五祭官の退場



終わってお茶ひととき。全員ホッととして顔も明るい。右から庄野理事長、多久の服部政昭さん。多久聖廟の楷樹に発し全国的な楷の木研究者。当館もお蔭で、いち早く楷樹植栽を得た大恩人である。次は再三御登場願う全国孔子像と聖堂について多年の研究実績を有される翠川文子先生。次は当館中哲講座の漢詩御担当いだたく大分大学助教森川登美江先生。次は大分大経済学部長神戸先生。大分県先哲史料館の田本政宏氏。当館中哲講座担当上田満



四万円

花田積夫 遠賀郡岡垣町  
井手 太 甘木市野鳥

式万五千元 田代直輝 大野城市

松尾清美 太宰府市高雄  
酒井カツ代 甘木市甘木  
今林 昇 福岡市東区  
中山一三 福岡市博多区  
石橋観一 福岡市西区  
菅 直登 ”

岩下須美子 ”  
藤野昌哉 福岡市城南区  
松尾嘉助 福岡市西区  
肥塚善和 ”  
上田 博 福岡市南区  
西 政憲 ”

和田慎治 福岡市東区  
上田 満 福岡市早良区  
溝口博義 福岡市城南区  
権藤税理事務所・権藤成文  
南誠次郎 春日市上白水  
笠井徳三 福岡市博多区  
結城 進 福岡市西区  
福岡流通警備保障(株)  
村上五一

真藤嘉世子  
神奈川県横浜市  
山谷悦也 東京都杉並区  
星野有司 群馬県前橋市  
伊藤 茂 神戸市東灘区  
杉浦五郎 愛知県安城市  
寺川泰郎 大分県日田市  
中山重夫 佐賀県唐津市  
神崎憲五郎 粕屋郡古賀町  
榎田正己 ” 粕屋町  
木下 勤 京都郡刈田町  
野見山薫 飯塚市片島  
吉瀬宗雄 浮羽郡田主丸町  
森光英子 久留米市国分町  
時川増喜 春日市小倉  
井手親栄 甘木市野鳥  
井上 清 ” 甘木  
具嶋菊乃 ”

九州三菱ふそう自動車販売  
(株)・宮崎慶一  
(株)福岡中央銀行・  
山本敬一郎  
日本製粉(株)福岡工場・  
白尾嘉弘  
(株)信和・日下部勲  
(株)クリーン開発・野田和禎  
江崎正直 東京都練馬区  
尾形善郎 佐賀県多久市  
本村康雄 三池郡高田町  
大久保津智夫

具嶋 菊乃(甘木)③・大久保津智夫(嘉穂)⑤  
庄野 直彦(直方)④・原田 國雄(宗像)⑤  
森光英子(久留米)②・西喜代松(北九州市)④  
永井 功(北九州)①・花田加代子(遠賀)③  
本村 康雄(三池)①・中山 重夫(唐津)④  
緒方 益男(佐賀)⑤・七熊太郎(佐世保)②  
七熊 正(佐世保)④・浦上 健(長崎)②  
田中 貞輝(愛媛)①・小堀 定泰(滋賀)③  
伊藤 茂(神戸)③・西村 俊隆(東京)④  
白水 義晴(東京)⑤・早船 洋美(東京)①  
翠川 文字(埼玉)①・石野智恵子(東京)④①  
多々羅幸男(千葉)④・江崎正直(千葉)①

【法人協賛会員および特別協力法人】  
九州電力(株)・大野 茂(福岡)  
新出 光・出光 豊(福岡)  
出光興産福岡支店・山本繁弘(福岡)  
(株)福岡中央銀行・山本敬一郎(福岡)  
医療・南川・整形外科・南川勝三(福岡)  
法人 日本製粉(株)福岡工場・白尾嘉弘(福岡)  
福岡県警備業協会・村上五一(福岡)  
流通 共済(株)・花田積夫(福岡)  
タイム社印刷(株)・安部博満(福岡)  
タム 組・笠 忠夫(福岡)  
博多ちくわ・(株)魚嘉・松尾嘉助(福岡)  
権藤税理事務所・権藤成文(福岡)  
協通配送(株)・富安 渡(福岡)  
大牟田運送(株)・本村康雄(福岡)  
三島設計事務所・三島庄一(福岡)  
西日本物流(株)・原 重則(福岡)  
西日 物急送(株)・原 重則(福岡)  
愛宕建設工業(株)・野村六郎(福岡)  
東洋特殊機工(株)・西尾敏明(福岡)  
西尾トラック運送(株)・西尾秀明(福岡)  
南愛光ビルサービス・野田和禎(福岡)  
南クリーン開発(株)・池田邦夫(福岡)  
延 寿 産 業(株)・野田和禎(福岡)  
九州三菱ふそう自販(株)・宮崎慶一(福岡)

【館の活動、館誌購読と催事企画に参加】  
友の会 年間3千円  
自然と文化の小天地創造

協賛会(個人)年間1万円  
「館維持、資料収集、施設整備等の資  
金援助を受ける」  
納入方法 郵便振替 0173019160970  
財団法人 能古博物館  
右の会費受領は、その都度本誌に掲載、  
以後会費相当期間を名簿にします。  
【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者  
負担)をご利用下さい。用紙はご連絡  
次第お送りします。

図書出版  
『閨秀 亀井少栗伝』  
詩書、画の作品で仙厓の次に多  
いのが同時代の亀井少栗。しかも  
少栗には艶麗な漢詩の恋歌まであ  
る。これが同女の作か否か。これ  
に始まる探究の書である。  
B5版・表紙布装美本  
限定二、〇〇〇部  
図録全カラー50頁・本文94頁  
直売頒価 三、〇〇〇円  
(送料 三、一〇〇円)

安河内商店・安河内紀男(福岡)  
木原税理事務所・木原敬吉(飯塚)

式万円

壹万円

|       |         |
|-------|---------|
| 丸橋秀雄  | 石川県金沢市  |
| 前田諒子  | 東京都東山区  |
| 庄野健次  | 名古屋市東区  |
| 浦上 健  | 長崎県西彼杵郡 |
| 甲本達也  | 佐賀県佐賀市  |
| 濱北哲郎  | 熊本県玉名市  |
| 嶽村 魁  | 大牟田市    |
| 古賀義朗  | 〃       |
| 古賀邦靖  | 〃       |
| 吉松一成  | 嘉穂郡筑穂町  |
| 松本修一  | 田川郡川崎町  |
| 松本雄一郎 | 粕屋郡新宮町  |
| 庄野陽一  | 久留米市通町  |
| 井手祐爾  | 甘木市野鳥   |
| 宮崎春夫  | 〃 堤     |
| 永田蘇水  | 福岡市東区   |
| 上田良一  | 福岡市中央区  |
| 神戸純子  | 〃       |
| 岡野敬二  | 〃       |
| 桑形シズエ | 〃       |
| 瀧栄三郎  | 〃       |
| 墨 羊子  | 福岡市南区   |
| 村上五一  | 福岡市城南区  |
| 疋田文五郎 | 福岡市早良区  |
| 荘山雅敏  | 〃       |
| 井上 忠  | 〃       |
| 藤木充子  | 〃       |
| 神田正明  | 福岡市西区   |
| 山中耕作  | 〃       |
| 村山吉廣  | 東京都町田市  |

|          |         |
|----------|---------|
| 石野智恵子    | 東京都北区   |
| 大島節子     | 〃 新宿区   |
| 山根ちづ子    | 〃 三鷹市   |
| 遠山寿一     | 〃 練馬区   |
| 早船洋美     | 〃 目黒区   |
| 中野晶子     | 〃       |
| 神奈川県相模原市 |         |
| 多々羅幸雄    | 千葉市船橋市  |
| 小山富夫     | 大阪府豊中市  |
| 辻本雅也     | 滋賀県大津市  |
| 山名美和子    | 埼玉県比企郡  |
| 坂本守正     | 〃 新座郡   |
| 田中貞輝     | 愛媛県松山市  |
| 大塚博久     | 山口県山口市  |
| 福田 殖     | 宗像郡福岡町  |
| 市丸義春     | 粕屋郡志免町  |
| 鈴木恵津子    | 〃 古賀町   |
| 戸原正次     | 〃 志免町   |
| 小山元治     | 飯塚市本町   |
| 花村信也     | 〃 新立岩   |
| 有松賢作     | 〃 飯塚    |
| 山本利行     | 直方市下新入  |
| 永井 功     | 北九州市小倉区 |
| 佐野 至     | 甘木市甘木   |
| 富田英寿     | 〃       |
| 黒川邦彦     | 〃 野鳥    |
| 時川三千夫    | 〃       |
| 川浪由紀子    | 久留米市中央町 |
| 小川誠一     | 筑紫野市筑紫  |
|          | 筑紫野市杉塚  |

|       |         |
|-------|---------|
| 野瀬 孝  | 筑紫野市原   |
| 星野定義  | 春日市紅葉ヶ丘 |
| 江川高二  | 〃       |
| 有吉林之助 | 太宰府市宰府  |
| 佐々木謙  | 〃 石坂    |
| 高原敬治  | 〃 五条    |
| 岩永 皓  | 福岡市東区   |
| 渡辺美津子 | 〃       |
| 大山右一  | 〃       |
| 岡本金蔵  | 福岡市博多区  |
| 橋本敏夫  | 福岡市中央区  |
| 青柳繁樹  | 〃       |
| 河村新一  | 〃       |
| 財部一雄  | 〃       |
| 三宅碧子  | 〃       |
| 矢富健治  | 〃       |
| 添田政晴  | 〃       |
| 添田玉彦  | 〃       |
| 行成静子  | 〃       |
| 大里豊男  | 福岡市城南区  |
| 桑野 顕  | 〃       |
| 増田義哉  | 〃       |
| 神谷 誠  | 福岡市南区   |
| 熊谷雅子  | 〃       |
| 山崎広太郎 | 〃       |
| 近藤典二  | 〃       |
| 深谷禎二郎 | 〃       |
| 永岡喜代太 | 〃       |
| 塚本美和子 | 〃       |
| 西尾健治  | 福岡市早良区  |

|       |        |
|-------|--------|
| 片岡洋一  | 福岡市早良区 |
| 星野 玄  | 〃      |
| 井手俊一郎 | 〃      |
| 中村幸雄  | 〃      |
| 玉置貞正  | 〃      |
| 古野開也  | 〃      |
| 吉原湖水  | 福岡市西区  |
| 末松仙太郎 | 〃      |
| 坂木継生  | 〃      |
| 安永友儀  | 〃      |
| 井上武次  | 〃      |
| 川島貞雄  | 〃      |
| 小野恵美子 | 〃      |
| 西島道子  | 〃      |
| 大原栄一  | 前原市長野  |

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
 休館日 毎週月曜  
 (月曜日が祝日の場合は次の日)  
 12月29日~1月3日  
 入館料 大人300円・中高生200円  
 交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
 →能古(徒歩5分)→博物館  
 〒819 福岡市西区能古522-2  
 ☎(092) 883-2881・2887  
 FAX(092) 883-2881